

# paper



no.005



津田和俊 × 松倉早星  
(研究者) (Webディレクター)



西田司・永田宏和  
(建築家) (企画・プロデューサー)



みんなのうえん  
コーポ北加賀屋



小田島等  
(イラストレーター)



## 津田和俊 × 松倉早星

(研究者)

(Webディレクター)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。5回目となる今回は、サステナブルデザイン研究、FabLab Kitakagayaの共同企画・運営を行う津田和俊氏、遊びやエラーをアイデアソースに、Webディレクションを手がける松倉早星氏を招き、それぞれが考える「これからのもの／ことづくり」についてお話いただいた。

### FabLabとサステナビリティの接続

**津田:** 僕は、サステナブルデザインや循環型社会の形成について研究してきました。あるとき、ほぼあらゆるものづくり方を共有していこうというFabLabの活動に興味を持ち、今年1月、コーポ北加賀屋にて、FabLab Kitakagayaを立ち上げました。**松倉:** 津田さんの研究については、以前お聞きしたことがあったのですが、FabLabの活動と結びつくのは意外でしたね。

**津田:** FabLabを知った当初は、僕のなかでも、あまり結びついていませんでしたね(笑)。きっかけは、Webマガジン「greenz.jp」編集長・兼松佳宏さんが2010年に企画した「デザイン×サステナビリティ×オープンソース=???’」がテーマのトークイベントに登壇したときのこと。以来、国内でのFabLab設立に向けたネットワークに参加しながら、このテーマについて考えています。

**松倉:** 大量生産や大量消費に対して、適量生産、オンデマンド生産を掲げるFabLabに共感したわけですね。昨今、ますます「ものづくり」への関心が高まりつつあって、ここ数年の間に職人の技術を使った商品も多く開発されている。ただ、それが継続的に職人たちへの利益や後継者を生み出すなど、伝統技術や職人が直面する本質的な課題が解決できているかという疑問が残ります。

**津田:** そうですね。継続可能な仕組みができていないものも少なくない。ただ、仕組み以前の話でもある。僕は、FabLabとして、「個人が内発的に提案してもものをつくるという姿勢」について考えたいと思っています。すでにある社会のなかで生きるのではなく、自らが関わっていくことで社会も変わっていくという感覚をもちたい。だけど、それは、Webや書籍では伝え切れない。やっぱり、人との出会いが大切なんです。

**松倉:** いま、津田さんのまわりに、FabLabに関心ある人たちが集まりつつありますよね。ここで培われたネットワークを生かして、いかに自分にフィットしたものを生み出していくか、出会った

人たちで会話できるようになったらおもしろいと思うんです。

**津田:** 必要なものを自分たちの手で生み出すというFabLabの考え方は、ものづくりの在り方を変える可能性があるし、実際、変わりつつある。一方でアイデアはあったけれど、いろいろな制約から世に出てこなかったものがつくれるようになると、かえって無駄なものを生み出してしまう恐れもある。そういう危険性もあるからこそ、FabLabをサステナビリティとつなげて考えています。

### ゼロか、イチか

**松倉:** 僕は2005年、東京の東エリアで開催されるアート・デザイン・建築の複合イベント「Central East Tokyo」のなかで、使われていない物件をアーティストに委ねて、そこで展示やパフォーマンスを行うというプログラムに参加したことがあるんです。そこで僕は、近くの多摩川に住むホームレスに生きる術を伝授してもらい、会期中、展示空間で暮らしてみました。家の建て方からご飯がもらえる場所、洗髪に最適な温かい水が出る場所など、生きるための知恵を直伝いただいたんです。

**津田:** おもしろいですね。普段、僕たちが生活するなかでは気づくことのできない生きた知識ですね。

**松倉:** そうなんです。日常生活やWebプランナーとしての活動では、知りえない知識がたくさんありました(笑)。会期中、「あいつ、あそこで暮らしているらしいぞ」と住民たちの間で噂になって、近所のおばちゃんの花壇を無償で貸してくれたり、いろんなものを持ってきてくれたり(笑)。人とのつながりや知識の交換を通して、いろんなことが可能なのだと実感しました。

**津田:** 何かをはじめるとき、ゼロからか、イチからか、2通りの表現がありますが、僕はゼロはないと思って。何も無いようでもイチなんです。広島が焼け野原だった当時の写真で、瓦礫からバラック



を建てて生活していたのを見て、僕はそう直感しました。

**松倉:** 知識も同様のことが言えると思います。特に、僕自身は物心がついたころ、インターネットがあった世代なんですね。ネット上には膨大な知識のアーカイブがあって、基本的には誰でもアクセスできることが前提の認識としてあります。例えば、貧しい環境でも、ネットを介して有名な大学教授の講義を受けることもできる。そういう意味で、知識がゼロの状況にはなりえない。

**津田:** ゼロではないという言葉には、過去のものか形を変えて残っているという意味が含まれていると思います。古代ギリシアの哲学者・デモクリトスは、「恐竜のしっぽについていた原子が、自分の鼻の頭についているかもしれない」と言ったそうです。それは、きっと本当だと思う。僕たちはそれに気づき受け入れて、創意工夫しながら生きていく方法を探せば良いんじゃないかな。

### 価値観を共有した、その先

**津田:** いまはものを修理することさえもサービスとして与えられていて、自分で考えて、必要なものをつくるにはどうしたらいいのか、わからなくなっている。そこから抜け出すためには、遊びながらものづくりを実践することがヒントになるのだと思う。

**松倉:** 技術の基礎を知り、自分にもつくれるのだと実感するための「遊び」ですよ。 「Make it real」というコンペで、3Dプリンターと3Dフォトスキャンを使って、公共空間の階段や壁の欠けた部分をいざらっぽく埋めていくプロジェクトを知りました。ひとりではできることと、これからの技術の可能性が感じられましたね。

**津田:** 重要なのは、ものをつくる楽しさや、それがもたらす思考をどう翻訳して伝えるか、共有するかですね。

**松倉:** 最近、「共有」の意味合いも変わってきたように思います。特に、10代後半や20代前半の人たちは、動詞として使っている

ことも多い。フォロワーが情報を見られるようにする、といった狭義の意味が変わってきている。ももとの意味は、ある空間における体験を通して、お互いが理解し合い、学ぶこと。シェアよりも「コモン」「公共」といった、もう少し空間的な概念でした。

**津田:** 知識共有が育まれる場という、遊び場やたまり場のような空間をイメージします。そこでは、興味ある知識にアクセスできるだけではなく、その周辺からも刺激を受けられる。

**松倉:** そういった場で人と接することで、共通する価値観が生まれたり、逆に異なる部分が見えてくる。例えば、先日の選挙では、Web上にいる仲間の意見が世論だと思込む側面が出てしまった。そこは、これから教育されていくと思いますが……。

**津田:** 自分に合ったサイズというのは、際限なくあるものではなくて、有限な資源のなかで最低限のニーズを満たしていくものだと思います。すなわち「これでいいのだ」という感覚。

**松倉:** それこそFabLabを利用すれば、自分にフィットしたものが生み出せますよね。そうすると、自身が所有するスケールも変わってくる。いま、世界中の人が新しく、より良いものをつくっていく状況にあります。これまでの、人のつながりやものづくりの技術、知識をどう共有するかという視点から、どう使い、自分に合ったものをつくり出せるか、議論する方向へシフトしている。そのことを考える人が増えていくことが、良いものを生かすためのヒントなのかもしれません。

津田和俊 Kazutoshi Tsuda	1981年生まれ。岡山県新庄村出身。ものの流れや循環に着目し、自然環境と人の関係性について考察している。2011年より大阪大学工学部/大学院工学研究科創造工学センター助教。2013年FabLab Kitakagayaを共同開設。
松倉早星 Subaru Matsukura	1983年生まれ。北海道富良野出身。クリエイティブ・ディレクター/プランナー。東京のWeb制作会社にてWebプランナーとして2年間在籍。2008年4月より、1-10designに転職後、2011年退職。同年12月ovaq inc.を設立。



## リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方

### 街から得た 小さな気づき

西田 司

Osamu Nishida



1976年神奈川県生まれ。横浜国立大学卒業後、首都大学東京大学院助手、横浜国立大学大学院(Y-GSA)助手、東北大学非常勤講師、東京大学非常勤講師などを歴任。2004年オンデザイン設立。代表作に「六本木農園」や「ヨコハマアパートメント」(JIA 新人賞)など。震災後、復興まちづくり「石巻 2.0」に参加。グッドデザイン復興デザイン賞受賞。

> 西田さんが選ぶ次のコラムニストは…  
武田重昭氏(大阪府立大学緑地計画学研究室)  
武田氏の活動は、「シビックプライド」「いま都市をつくる仕事」など、常に人を巻き込み、フラットで且つオープン。(西田)

### まちづくりでの 「風の人」としての作法

永田 宏和

Hirokazu Nagata



大阪大学大学院修了後、ゼネコン勤務を経て、2001年企画・プロデュース会社、iop 都市文化創造研究所を設立。2006年NPO法人プラス・アーツを設立、理事長に就任。昨年よりデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)の副センター長も務める。主な仕事に「水都大阪 2009・水迎の文化座」「イザ!カエルキャラバン!」などがある。  
<http://www.plus-arts.net/>

> 永田さんが選ぶ次のコラムニストは…  
曾我部島史氏(みかんぐみ・神奈川大学教授)  
建築家の枠をはるかに超えたまちレベルの視点を常に持っておられる方です。(永田)

あるとき、小さい頃に育った金沢シーサイドタウンが有名建築家・横文彦氏のアーバンデザインだと気づいた。できた当時の文献を探し、当時の計画の想いを読むと、まちの豊かさを次世代に託すため、道路計画や緑地計画、小学校など公共施設の計画に意志を埋め込んでいたことを知った。その環境で幼少生活を過ごした僕が、大人になってまちへ戻ると、まちは高齢化が進み小学校は廃校となり、商店街は空洞化でシャッターが増えていた。人はまだいるにも関わらず、丁寧に計画された道路や緑地は生活とリンクしておらず、空虚感を高めている。わずか30年前に投資され、つくられたまちの資源が、受け継がれていない状況を見て、どんなに素晴らしい計画も、つくった時代背景が変われば徐々に機能不全が起こる。時間経過とともに作り手も使い手も一緒になり建築やまちを更新し、再編集していく対話の場が必要だと感じた。

また別のとき、大学の研究の一環で、東京・神田の路地活用方法を住民と一緒に考えると

まちづくりには「風の人」「水の人」「土の人」がいて、それぞれがそれぞれの作法をまっとうすることで、その活動自体はうまくいくのではないかと考えている。ここでいう「土の人」とは土着の人、つまり地域住民であり、「水の人」とは地域活動を支える中間支援組織のNPOだったり、行政だったり、活動に興味を持ち参加する学生やボランティアだったりする。そして「風の人」は、「土の人」に刺激を与えるような「種」、言いかえれば、活動やプログラムを運んでいく存在であり、まちづくりコンサルタントやNPOだったりする。私たちの団体、NPO法人プラス・アーツは「風の人」であり、「風の人」の作法をまっとうし、究極の「風の人」になりたいと日々考えている。究極の「風の人」がこだわるのは「種」である。地域に刺激を与え、自主的な活動を誘発する究極の「種」とはいかなるものか……。これまで実践してきた、たくさんのプロジェクトを通して私たちは「種」のしつらえ方に関してふたつの極意があることを学んだ。ひとつ目は、

いう実践型ワークショップが開催された。建築専門家という立場で参加した僕は、建築的なアイデアも、飲食店のテイクアウトメニューも、おばあちゃんの子供を思う小さな気配りも、すべてフラットにテーブルに乗り、まちを良くするための手段として議論されていることに、素直に驚いた。僕の意見や建築的見解は、まちの暮らしの豊かさにとって「ある側面」でしかなかったのだ。住民は、その総体としてのまちとコミュニケーションしている。ハード的アイデアは、まちの多様さの一部でしかない。ただそれだけのことに気づいていなかった僕は、けっこう衝撃を受けた。

このふたつの実感、僕にとって小さいながら大きな気づきだった。成長の時代に教育を受けた僕にとって、建築はまちを成長させる役割だったが、まちを使う時代(縮退時代)の建築の役割を考える、価値転換のきっかけとなった。

「種」そのものが、圧倒的に楽しかったり、美しかったり、感動的だったり、魅力的でなければならぬということである。こうした魅力を生み出すには“超常識”の手法「+arts」が有効である。アートやデザイン、既存概念にとらわれない自由な発想を注入することで、「種」に魅力を与えることができる。そしてもうひとつの極意が、「不完全プランニング」である。「種」そのものを完璧に設えすぎないこと、外側の皮をゆるい状態にして誰でも手伝えるように隙だらけ、穴だらけにすること。そうすれば、「種」に出会った「土の人」たちはどんどんその活動やプログラムに参加し、最終的には、自分たちのものとして定着させていく。これが「風の人」の究極の作法であり、「種」づくりの極意である。具体的な事例が知りたい方はNPO法人プラス・アーツのWebサイトを参照いただきたい。



## オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

### 北加賀屋みんなのうえんのいま

ともに学び、ともに育てる農園づくり



「スーワークショップ屋台」開店!

Date 2013.3.29 15:30-19:30 Venue 名村造船所大阪工場跡地

千島土地／おおさか創造千島財団主催のレセプションパーティーにて、「スーワークショップ屋台」のお披露目とこれまでの活動のプレゼンを行った。お客さんから「おいしい」「おもしろい農園だね!」という言葉をいただき、この日に向け、1月から試行錯誤しながら進めてきた準備が実を結んだ。今回の屋台は、チームごとに用意したスープをお客さんがひとつ選び、そこにトッピングを加え、オリジナルのスープを完成させるというもの。一人ひとり異なるスープをきっかけに新たな会話とつながりが生まれていたように思う。思い起こせば、ここまでの準備は一筋縄ではいかず、作物がうまく育たなくて途方に暮れたことも。しかし、その大きな壁をみんなで乗り越えることができ、さらなる結束を強める機会となった。

金田康孝(NPO法人Co.to.hana)  
デザインで社会の課題を解決するNPOに所属。アートの創造性と農を通して、世代を超えたつながりを生み出し、潤いのあるまちづくりを行っている。

### 堀田裕介のとれたてごはん

#### 新玉ねぎ入り マーブルポテトサラダ

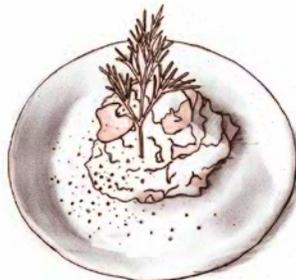


Illustration: Shingo Kokaji

堀田裕介: 1977年、大阪府生まれ。「食べることは生きること、生きることは暮らすこと」をコンセプトに、ケータリング、商品開発、料理教室、ワークショップなどを企画。

### コーポ北加賀屋のいま

多分野で活躍する協働スタジオの動き



photo: Riho Shibata

what(n)ever

Date 2013.4.5-5.6 Venue adanda

京都市立芸術大学出身の作家を中心とした本展は、企画から広報、展示に至るまでほぼすべて作家たち自身が主導してつくっている。展示内容についての細かな描写は割愛するが、本展を運営する立場から、改めて展覧会をつくるとはどういうことかを考えさせられた。この展覧会は間違いなく良い。それぞれの作品はとてもいきいきとした表情が出るように展示されているし、場所の持つ「遊び」の幅を作家たちも時間をかけてうまく取り込んでくれた。そうした部分に技を十分感じられた展示だと思う。展示はおもしろい、スペースも良い。ただ、人の入りには大変苦勞をする。いかに多くの目に触れる機会をつくることができるか、限られた時間・予算で何を取捨選択するのか、改めて問われた気持ちになった。

小西小多郎(adanda)  
adanda主宰。より良く生きるをモットーに美術・舞台・音楽と関わり、今に至る。

### 北加賀屋オルタナティブスポット



#### 路地裏空中庭園

私道の奥にひっそりとある屋上庭園。この庭園は建物と建物をブリッジするように存在する。私道にはある種の自由がある。私道にはある種の自由がある。道を共有する人たちの合意でカスタマイズ可能になるからだ。道に対して「私たちの空間」という想いも強い。空間をもう一度手元に引き戻すことができれば豊かな風景が現れるだろう。

家成俊勝: 1974年、兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学卒業後、大阪工業技術専門学校夜間部を経てdot architectsを赤代武志と共同で主宰。

# TOPICS from CFCO

おおさか創造千島財団 (CFCO) は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

## NEWS

### 2013年度公募助成 対象活動決定

当財団の2013年度公募助成には、計81件の申請があり、選考委員会を経て以下の通り助成活動を決定いたしました。

#### ②創造活動助成 11件 ※[]内は申請者名/申請者名50音順

● こどものための建築ワークショップ [Haricots] ● 炭木から世界へ発信する「新しいメディア・プロジェクト」 [炭木芸術中心] ● 鉄道芸術祭 vol.3「本の展覧会(仮)」 [京阪電車なにわ橋駅アートエリアビーワン運営委員会] ● 10±10(テン・プラスマイナス・テン) [NPO 法人子どもとアーティストの出会い] ● 志賀理江子・梅田哲也・contact Gonzo、3者による合同東北ロードツアー(仮) [contact Gonzo] ● 農民車製作プロジェクト-3 自作自動車の展示会における「農民車の仕事」を探る調査研究ドキュメント映像製作と発表 [NPO 法人記録と表現とメディアのための組織 (remo)] ● TANET(屋上菜園ネットワーク) [多田衣里] ● 「AHA!」「ご近所映画クラブ」・「馬木たべだすけ」 in Umakicamp [ドットアーキテツ] ● FabLab Kitakagaya のスタジオ改装及び運営 [ファブラボ北加賀屋] ● Breaker Project [ex・pots2013] [ブレイカープロジェクト実行委員会] ● 大阪におけるクリエイティブの状況を発信するフリーマガジン「SUPER:」の巻頭特集の書籍化および出版計画 [UMA/design farm+MUESUM]

#### ①スペース助成 4件 ※[]内は申請者名/申請者名50音順

● 大橋可也&ダンサーズ+空間現代大阪公演 [大橋可也 & ダンサーズ] ● 種から育てる子ども料理教室 [種から育てる子ども料理教室] ● dracom 祭典 2013「BOU (in Osaka)」 [dracom] ● DESIGNEAST04 topophilia -場への愛-(仮) [DESIGNEAST実行委員会]

「創造活動助成」の選考では、拠点の形成、メディアツールの構築、芸術教育、地域活性化のためのプロジェクトなど、活動内容は多岐にわたりますが、地域と連携し、今後の展開に期待できる活動が採択となりました。また、今回から助成金の交付も行う「スペース助成」の選考では、クリエイティブセンター大阪の場の可能性を高める、新しい活用を提案する活動を選出。

前回同様、これまでの活動経歴の独創性は高いものの、自分たちが成し遂げた成果や課題についての自己認識不足から提案力が弱まり、助成交付による効果などが申請書のなかで表現しきれておらず、採択に至らなかった案件も複数ありました。

今後は、社会やコミュニティに寄り添う企画のみならず、社会のなかの違和感やズレを創造的な切り口で提案する先駆的・実験的企画、個人や若い世代からの時代を切り開く挑戦的な試みが多数申請されることを期待します。

## ACTIVITY

### 2012年度 創造活動助成

#### Breaker Project「ex・pots 2012」

文・松尾真由子(ブレイカープロジェクト実行委員会事務局)

西成区・山王の新・福寿荘を拠点とした地域密着型アートプロジェクト。呉夏枝「編み物をほどこ/ほぐす」、山田亘「西成なるへそ新聞」では、地域の人々の個人的な記憶や歴史に着目。大友良英は児童館や学校と連携し「集団即興オーケストラ」のワークショップを長期的に実施。また梅田哲也は、商店街や空き家などを活用した作品制作も始動させるなど、2011年から2013年度にかけて各アーティストが継続して地域と関わり、活動を進行中。



photo: Kim Saiki



dracom 祭典 2012「弱法師」(2013年度スペース助成)

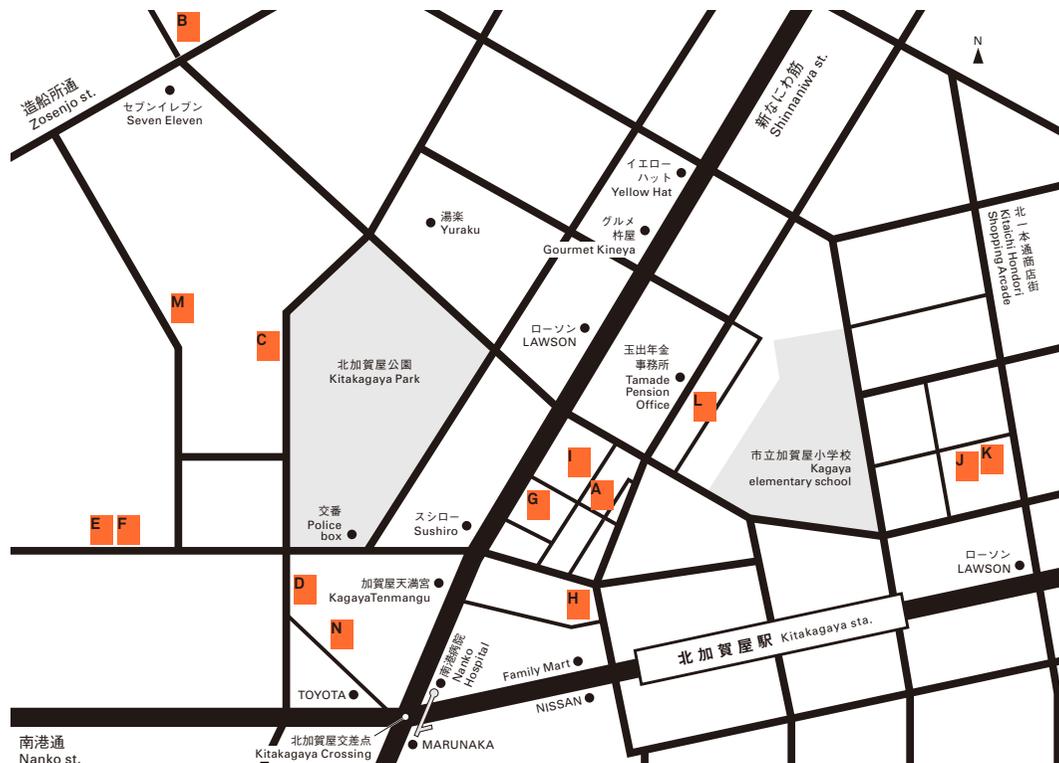


photo: Hideaki Hamada

ドットアーキテツ「Umaki camp」(2013年度創造活動助成)

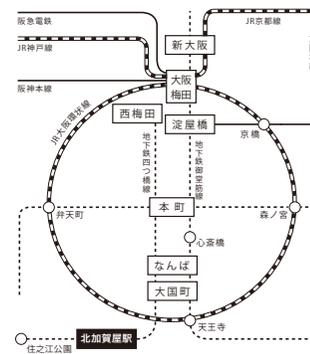
# MAP

おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



2013年5月28日現在

- [A] ク・ビレ邸/インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL: shoosen-kwan.com/
- [B] クリエイティブセンター大阪 (CCO) / 複合アートスペース [北加賀屋 4-1-55 名村造船所旧大阪工場跡地] URL: www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL: www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL: www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 芸術中心●カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [F] 鞆鞆館 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL: airosaka.com/
- [H] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ&オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL: www.cotohana.jp/
- [I] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ&アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL: www.kakureya1632.com/
- [J] cornucopia / ギャラリー [北加賀屋 1-6-28 カガ第2ビル1F] URL: cornucopia-osaka.blogspot.jp/
- [K] 騒ギニ乗ジテ / ギャラリー・バー [北加賀屋 1-6-1 カガ第1ビル1F] URL: sawaginijoujite.jimdo.com/
- [L] 北加賀屋みんなのうえん(クリエイティブファーム)① / コミュニティファーム [北加賀屋 2-4-6] URL: minnanouen.jp/
- [M] メガアート倉庫(仮) / オープン・ストレージ [北加賀屋 5-4-48]
- [N] 北加賀屋みんなのうえん(クリエイティブファーム)② / コミュニティファーム [北加賀屋 5-2-27] URL: minnanouen.jp/



主要駅から北加賀屋までのアクセス  
○ 地下鉄「梅田」駅から地下鉄御堂筋線で「大国町」駅まで約10分、地下鉄四つ橋線に乗り換えて約8分  
○ 地下鉄「西梅田」駅から地下鉄四つ橋線に乗り換えて約17分  
○ 「関西空港」駅から南海空港線で「粉浜」駅まで約53分、徒歩で約20分



小田島等 / Hitoshi Odajima

1972年東京生まれ。イラストレーター/デザイナー。桑沢デザイン科在学中に、スージー甘金氏に師事。5月10日(金)～6月2日(日)、大阪・中之島 de sign de >にて個展を開催。

40年東京に住んで疑問が湧いてきた。「大好きなゴッホは、いろんなトコに住んでたじゃん！」って。で、関西へ移り住んだんです。大阪ってちょうどイイ街ですよ、ホントに。(小田島)

paper C No.005  
by Creative Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が主に拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2013年5月28日

発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局

〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階

TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188

URL [www.chishimatochi.info/found/](http://www.chishimatochi.info/found/)

編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 [MUESUM]

アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]